

Contents

- 02 目次
プロローグ Vol. 27
- 04 特集 学びの現場
未来の社会を創る
 - 06 日本と世界の教育の今
 - 08 たがいのよさを認め合える授業を实践 岐阜県可児市
 - 10 違いが美しいと言える社会へ 神奈川県横浜市
 - 12 JICAと学ぶ開発教育
 - 14 障害の有無にかかわらずすべての子を受け入れる学校へ
モンゴル
 - 16 ニーズに柔軟に対応し、広く学習機会を提供 パキスタン
 - 18 みんなで知恵を出し合い、ともに動く ニジェール
 - 20 学校に子どもたちの居場所をつくる ヨルダン
 - 22 学びの現場をサポート 開発教育支援
- 24 JICA海外協力隊がゆく Vol. 26
ザンビア
- 26 ザ・研修⑭
10年の協力で多くの人材を育成
- 28 地球ギャラリー Vol.148 マダガスカル共和国
写真・文●阿部雄介(フォトグラファー)
レムールの楽園を守れ
- 34 教えて! 外務省
知っておきたい国際協力⑳
- 36 JICAイベントカレンダー
- 38 広報室から、プレゼントほか
- 39 JICA PRESS
- 40 わたしが見つけたSDGs Vol.28

*掲載されている情報は取材当時のものです。



JICAは教員などに途上国の現場を見学してもらう教師海外研修に取り組んでいる。その学びが日本の子どもたちの国際理解教育に生かされる。



信頼で世界をつなぐ
Leading the world with trust

プロローグ Vol.27 みんな違って 当たり前前の社会

文・ウスビ・サコ

マリ系日本人の私から見ると、日本の多くの人は決められた枠にはまって暮らしているように感じます。たとえば、私が学長を務める京都精華大学には日本で唯一のマンガ学部があり、漫画好きの学生が通っています。リアルの世界では周囲に合わせて生きて、本当の自分は漫画という枠のなかだけで表現する学生も少なくありません。しかも、作者として自分が表に出るのではなく、既存の作品をもとにする二次創作など匿名性を保ったところで漫画を描くのです。

大人の世界もそう。ふだんは男性として会社に勤め、仕事が終われば女装をするトランスジェンダーの人もいます。魚釣りや楽器の演奏を趣味にしている教員が、「これは学校では言わないで」と隠そうとすることもあります。日本人の個々は多様化しているのになぜか本当の自分を隠すのです。それは、まだ誰もが個として認められる社会になっていないからでしょう。子どもの頃から学校や家や地域で、「みんな違って当たり前」ということを教えられてこなかったから、枠から外れた自分を人前にさらすことができないのです。

本当の自分を表に出すには、学校や会社などの組織で多様性を大切に考え、認め合う姿勢が必要です。私は学長になった2018年に「ダイバーシティ推進宣言」を発表し、ダイバーシティ推進センターもそれに先立って17年に設立しました。宣言では、みんなが人間の多様さにふれる機会を設け、おたがいの違いを認識しようとするプロセスから生まれる「価値観の変化」や「他者への想像力」をもとに、新しい発見や思考、創造性を高めようと謳っています。ただ、多様性をちゃんと理解しないまま、「多様性が大事。趣味を持とう」というスローガンを学校や会社で掲げて、いきなりみんな興味を持ち始めるのも日本人の不思議なところ。「なんでやねん!」とツッコみたくあります。

人種や宗教、文化、ジェンダー、障害の有無といった多様なバックグラウンドを認め合えば、その人の見えなかった面を発見でき、そこから学ぶことができるはず。新しい共創の関係が生まれるかもしれない。これまでは、社会から期待される限定的な自



イラスト●中村知史

分しか表に出さなかったけれど、あらゆる人が本当の自分を堂々と出すようになれば、豊かで、広がりのある社会になるのではないだろうか。

私が日本に来たのは1991年で、その頃は国際化というスローガンをよく耳にしました。学校では国際教育が盛んに行われ、私もアフリカ・マリ共和国からの留学生として小・中学校に呼ばれ、子どもたちと交流しました。そのとき思ったのが、国際教育やグローバル教育というスローガンを掲げるよりも、「みんな違って当たり前」と伝えて、目の前の人を理解するための教育を行ったほうがグローバルな人材が育つということです。子どもたちに最初から「世界では」と大きくて遠い話をしても、ぼかんと口を開けてしまいます。それよりも自分の隣にいる人がどんな人かを理解し、おたがいを認める大切さをわかりやすく教えることで、次第に地域や日本の多様性を考えるようになり、やがては世界の多様性に思いを馳せていくと思います。

私はふだんから学生たちとフレンドリーに接しているので、「サコ先生はどうして豚肉を食べないの?」とストレートに質問されます。「イスラム教の戒律でそう決まっているから」と答えると、「イスラム教って、何なん?」と会話が始まり、タブー視されがちな宗教についても語り合うことができます。そんなふうに、宗教もジェンダーも障害の有無もタブー視しない姿勢も大事でしょう。

もう一つ大切なのは、体験です。世界に目を向ければ、日本国内で暮らすよりもさらに自分を相対化できる多様な価値観にふれることができ、自分とも向き合い、自分を取り巻く環境の価値がわかってくるはず。その体験は貴重なものになります。とくに若い人たちには旅をしてほしいですね。今はコロナ禍で難しいですが、近い将来には新型コロナウイルスも克服して世界中へ旅することができるようになると信じています。世界には未来へとつながる多様な体験を積む場が広がっています。

* Diversity = 多様性を意味する言葉。

ウスビ・サコ(Oussouby SACKO)

1966年、マリ共和国の首都バマコ生まれ。京都精華大学学長。85年、中国に留学。92年に京都大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程に入学し、99年に同博士課程を修了して博士号(工学)を取得。2001年、京都精華大学人文学部専任講師に就任。02年に日本国籍取得。人文学部教授、学部長を経て、18年に学長に就任。研究テーマは「居住空間」「コミュニティ再生」などで、社会と建築空間の関係性についてさまざまな角度から調査研究を進めている。著書に、『アフリカ出身学長、日本を語る』(朝日新聞出版)など。5か国語を話すマルチリンガルで、得意な言語は関西弁。